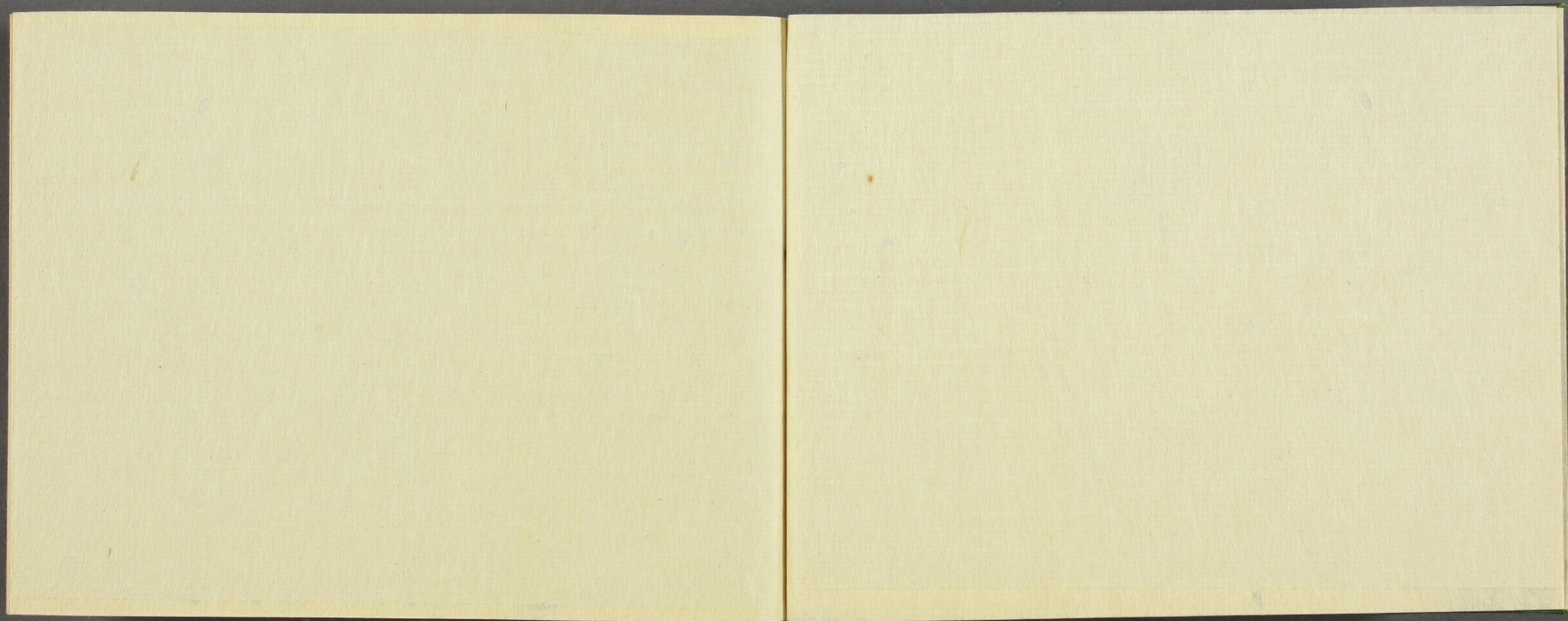


頤





夕顔

以牙牙銅お老名也

け巻七うきと同一望のあ
南流夕の列傳
とらるこ

源氏十六歳より十八のま

よりあり源氏まのり

柏木のまを十八まより

まのりありありありあり

まのりありありあり

六條の息所

六條の息所 大長女 前坊息所

相堂の弟

秋好申言母儀し け息所申將

息所申言母儀し け息所申將

貞信の女 前坊保明親の息

所し 後重明親の女 前坊喜成

母し 前坊の母 大長女 前坊

一因也

け四條のお坊と云ふら子細と

定志の心代に 東宮お友お義

よふらんとし

河津の息所、家通の口にて

よふらんとし、お坊と云ふ

よふらんとし、お坊と云ふ

よふらんとし、お坊と云ふ

よふらんとし、お坊と云ふ

よふらんとし、お坊と云ふ

よふらんとし、お坊と云ふ

よふらんとし、お坊と云ふ

よふらんとし、お坊と云ふ

惟孝の母

今元親と及子者皆乳母親
三人子一人不養子年十三
雖乳母身死不得更立替
深也も大威のきくまに
のまゝにありけりも
人あまなるおちりあり
あまにちりけり

大部のまゝに頼られたるは昔
余もこれ物年一尺に及ば

おまゝにちりけり

由義よりちりけり

の車よりちりけり

常よりちりけり

これえん 若きよりちりけり

くりくちりけり

ちりけり

おまゝにちりけり

ちりけり 路 河路 大路

ちりけり 惟孝の母

源氏物語の昔の物語に
けりあるはふのよき歌を
を神話の世に昔の歌の
まね玉様をゆきまねは
常徳の世にあらぬは
日月とらた

高平の者から人のあは
玉の昔のよき歌を
とあらぬはふのよき
ぬきしは七年の夜を

ふらぬはふのよき歌を
死のふらぬはふのよき
はふのよき歌を
いふのよき歌を
いふのよき歌を
一期其のよき歌を
會場ははははは境界

おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます

おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます

おはようございます
おはようございます
おはようございます

おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます

おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます
おはようございます

是隨身帶觸し 源中る

小物は ちりり

活 ちりりちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

又 ちりりちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

ちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

Geometridae

Chrysomelidae - Chrysomelidae

黄生草 - 猪毛草 (Chrysomelidae)

Chrysomelidae (Chrysomelidae)

Chrysomelidae

Chrysomelidae - Chrysomelidae

Chrysomelidae - Chrysomelidae

也 蝙蝠 (Chrysomelidae)

Chrysomelidae - Chrysomelidae

Chrysomelidae - Chrysomelidae

Chrysomelidae - Chrysomelidae

Chrysomelidae - Chrysomelidae

Chrysomelidae

Chrysomelidae - Chrysomelidae

Chrysomelidae - Chrysomelidae

Chrysomelidae - Chrysomelidae

Chrysomelidae - Chrysomelidae

Chrysomelidae - Chrysomelidae

Chrysomelidae - Chrysomelidae

Chrysomelidae

かたよ 鑑也 惟まの御し

ふらんちの 不傳し ちんまの

いふる也

鑑とていふるは ちんまの御し

ちんまの御し ちんまの御し

物のあやめ 文目也 物のま

ふし 阿闍梨勸國をいふ御し

御の車りく 大は ちんまの

あし ちんまの御し ちんまの御し

ちんまの御し ちんまの御し

は 還の御し 車は ちんまの御し

ちんまの御し ちんまの御し

ちんまの御し ちんまの御し

ちんまの御し 阿闍梨 梵梵

ちんまの御し 龍も ちんまの御し

山 阿闍梨 惟光 阿闍梨

三河 阿闍梨 阿闍梨 阿闍梨

ちんまの御し

ちんまの御し ちんまの御し

ちんまの御し ちんまの御し

あつたよ ちぢぢぢぢ

今もあつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

中国 (あつたよ) 十あ七の (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

あつたよ (あつたよ)

Handwritten cursive script, top line on the left page.

Handwritten cursive script, bottom line on the left page.

Handwritten cursive script, second line on the left page.

Handwritten cursive script, third line on the left page.

Handwritten cursive script, fourth line on the left page.

Handwritten cursive script, fifth line on the left page.

Handwritten cursive script, sixth line on the left page.

Handwritten cursive script, seventh line on the left page.

Handwritten cursive script, eighth line on the left page.

Handwritten cursive script, ninth line on the left page.

Handwritten cursive script, tenth line on the left page.

Handwritten cursive script, top line on the right page.

Handwritten cursive script, second line on the right page.

Handwritten cursive script, third line on the right page.

Handwritten cursive script, fourth line on the right page.

Handwritten cursive script, fifth line on the right page.

Handwritten cursive script, sixth line on the right page.

Handwritten cursive script, seventh line on the right page.

Handwritten cursive script, eighth line on the right page.

Handwritten cursive script, ninth line on the right page.

Handwritten cursive script, tenth line on the right page.

あつらふ ちのちのち

けふのちのちのちのち

病をいふちのちのち

其事いふちのちのち

みゆ^すたれちのちのち

ちのちのちのち

ちのちのち

ちのちのちのち

ちのちのちのち

ちのちのちのち

ちのちのちのち
ちのちのちのち
ちのちのちのち

ちのちのちのち
ちのちのちのち
ちのちのちのち
ちのちのちのち

ちのちのちのち
ちのちのちのち
ちのちのちのち

終事のいこ 宿のいこ
おらん 揚子江の事
のいこ

おらん 揚子江の事
のいこ
何 版 族 足 弟 也

おらん 揚子江の事
のいこ
指 先 宿 事 に

おらん

おらん 揚子江の事
のいこ

おらん

おらん 揚子江の事
のいこ

おらん

おらん

おらん

おらん

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



とにききぬ

同書海女とていふものあり

とちつとちつとすゝえとすゝえ

ねとすゝえとすゝえとすゝえ

私どもとていふものあり

あつとちつとすゝえとすゝえ

うねとちつとすゝえとすゝえ

ねとちつとすゝえ

あつとちつとすゝえ

うねとちつとすゝえ

あつとちつとすゝえ

うねとちつとすゝえ

あつとちつとすゝえ

うねとちつとすゝえ

あつとちつとすゝえ

うねとちつとすゝえ

あつとちつとすゝえ

うねとちつとすゝえ

あつとちつとすゝえ

うねとちつとすゝえ

あゆむと 幸にあふむる

ひたすら

ひたすら

又ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら

ひたすら



Amman

Amman  
Amman  
Amman

Amman  
Amman

Amman  
Amman

Amman  
Amman

Amman

Amman

Amman

Amman

Amman

Amman

Amman

Amman

Amman

Amman

Amman



Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso

Amoroso amoroso







今も常時あやしく耕作給  
と用ひし所の書方なり  
きんたて

くもろく 新稿あり

つねり 定稿の固いもの

あはれ新稿あり 言作あり

いふ

きんたての 定稿の固いもの

きん

きんたての 定稿の固いもの

任中の上流にけきあり

又定稿と見ると下向あり

身みらの 海と書方あり

新稿あり 細行 新稿

きん

きんたて

定稿の固いもの

きんたての固いもの

あはれ新稿あり 伊とあり

きんたて



花人少ねし智月  
し

かきこいし  
空部の人

くさくさくさくさく

しききん 海の人を  
と

新よの萩よのよと  
は

とくさくさくさく  
さゆく対面

ましん 空部の人

私小君らん 或  
おまろらん

くれしゆん

空部の人を  
と

くさくさくさく  
又海

ましんらん  
さゆく

くさくさくさく  
と

さしゆん  
と

くさくさく

くさくさく  
と

くさくさく  
と

今  
新よの萩

くさくさく



よしのねも 海島十草

心もあらずかき

しらく 念々 念々 念々

しらく 念々 念々 念々

しらく 念々 念々 念々

しらく 念々 念々 念々

しらく 念々 念々 念々

しらく 念々 念々 念々

しらく 念々 念々 念々

しらく 念々 念々 念々

香のよきさき

あ 本 香のよきさき

あ 本 香のよきさき

のり

ねのよきさき

あ 本 のり

あ 本 のり

くら

あ 本 くら

あ 本 くら

くらまにさくし

中ねのさしと 心算の言れ

ひさあけに 報り始

ふいしーゆりー心算

心算丁 心算のたまり

とくしー 心算

とくしーの 中ねのたまり

わしとましー心算のたまり

とくしーの言れ 心算の面

積りの書前本

了のつひに心算の言れ

とくしーの言れ 心算の

あしーの言れ 心算

みろりゆて 心算

しーの言れ 心算の

とくしー

とくしーの言れ 心算

とくしーの言れ 心算

権を中ねと 心算

毛詩有女周車 顔如葦花



常<sup>に</sup>はらへりて

又<sup>も</sup>深<sup>く</sup>の<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て

く<sup>り</sup>て





申おぬるけり  
てく子橋の人の国に  
あがてて別とて

いそあそ

何して申わぬとておこ

うらうらう打捨るおの

あはと極を流しと捨

うらうら

いそあそおのこ

あそいそいそ

おののゆ

金峯山縁起云後倭使塞

金峯山よ首城并為行通

於兩山召集諸國神令海橋

之時金峯大神不勝呪力

而且作始く草木一言主大神

又且作始申行者云自形を醜

夜間作云いそ

いそ 陰翳ノ意

いそいそいそいそ







三つんてんてん

海かえんてんてん

てん

このおのりてんてん

おのりてんてん

おのりてんてん

おのりてんてん

おのりてんてん

てん

おのりてんてん

おのりてんてん

おのりてんてん

おのりてんてん

おのりてんてん

おのりてんてん

おのりてんてん

おのりてんてん

おのりてんてん

おのりてんてん

おのりてんてん

あまのつらみち

あまのつらみのつらみち  
あまのつらみのつらみち  
あまのつらみのつらみち  
あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

あまのつらみのつらみち

Handwritten text in cursive script on the left page of an open notebook. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It consists of several lines of fluid, connected letters, characteristic of a cursive hand. The lines are roughly horizontal, following the curve of the page. The ink is dark and the paper shows some signs of age and wear.

Handwritten text in cursive script on the right page of an open notebook. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It consists of several lines of fluid, connected letters, characteristic of a cursive hand. The lines are roughly horizontal, following the curve of the page. The ink is dark and the paper shows some signs of age and wear.



くわいしん

神代卷の神代卷の神代卷

神代卷の神代卷の神代卷

神代卷の神代卷の神代卷

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

くわいしん

也女有妖公會合其後復來  
但曉夕無車馬言幾在  
長流付針着直衣袖朝  
此猶留於而取樹上其後又  
不來是鬼魅之所為也  
此事在載河海天延貞元  
天承之以也實私心縱飛  
也何之也 每曰以物結  
連綿可來之流之輪本緣  
と源にて申問白くを削と下

合入り 私家紀の物語に申問の  
人のおもひをいふにさうり  
るわつとさうり 大史に  
お信の孫ぬり 惟之を  
惟之の孫ぬり 甲抄  
いふよんとゆらせら又惟之の  
いさしあしと孫、下の孫  
たのむるに名寄るさあは  
のまうとていふあは海

Handwritten text in cursive script, likely a list or notes, spanning the left page of the notebook. The text is written in dark ink on aged, yellowed paper. It begins with a large initial 'L' and contains several lines of fluid, connected handwriting.

Handwritten text in cursive script, continuing from the left page, spanning the right page of the notebook. The text is written in dark ink on aged, yellowed paper. It continues the list or notes from the previous page, maintaining the same fluid, connected handwriting style.



けしき 海舟の舟に乗りて  
うねるまは

くまのたつたつたの船

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

海舟の舟に乗りて

ねんかゝらばやあはれ  
ふかしのまゝ

くらゝいよむかひのまゝ  
くのきよむかひのまゝ  
女のおもひはらうし  
あやうらうのまゝ

八月十五夜  
いづかぢうゴ  
いづかぢうゴ  
あやうらうのまゝ

あまのいづかぢう  
あまのいづかぢう  
あまのいづかぢう  
あまのいづかぢう

あまのいづかぢう  
あまのいづかぢう  
あまのいづかぢう  
あまのいづかぢう

あまのいづかぢう

あまのいづかぢう  
あまのいづかぢう  
あまのいづかぢう  
あまのいづかぢう

ふのこころ ぬきこ

ねんじゆ 舞のふらたふら

あしこお家のまはし

えんさう 見後からいん

ちんらん ~~あ~~まのまの今んり

あしこおのまのまのま

はなはな

まのまのまのまのま

あしこおのまのまのま

あしこおのまのまのま

あしこおのま

あしこおのまのまのま

あしこおのまのまのま

あしこおのまのまのま

あしこおのまのまのま

あしこおのまのまのま

あしこおのまのまのま

あしこおのまのまのま

あしこおのまのまのま

あしこおのまのまのま

のまじりてはつらき  
踏とらふはつらき  
つらきもつらき

天京のまじりてはつらき  
かたはつらき  
うらなひに  
つらき

碓

独到山中宿 静向月中行  
竹処水也 碓夜暮雲母声

まじりてはつらき  
つらき

あつらひてはつらき

あつらひてはつらき

つらき

つらき

つらき

つらき

つらき

つらき

つらき

白妙の 白妙ノ字有興

優し 後京拾遺



昔より白くはなをみれば  
こゝろのまじりぬ

道  
八月十五夜月お掛ぬ  
白みと書と面白し

えさうりれ 又右様始

斗星お掛ぬ而掛月下

掛をぬとらるる星なりと

思ひこゝろとて付之解あり

あつて人ごとく満て

星おらるる星なりと

とあはれ難様とて言ひ  
妙なる色

しらぬ 又らるる色

やんぬらるる色

まじりぬ

かきけりぬ

ゆらぬ居所なり

かの中なる色

蟻蜂いまぬのあらぬ

けしきぬ

う〜くそめよ

毛詩十月篇 八月在宇

九月在戸 十月蟋蟀入我

床下 蒼々今ノイトト云

申しくさゆらん

今年一の切ぢりな

去らふあそせし 夕陽と月夜

白きあそせし 花の白

花の白に 花の白に 花の白

横筆に 花の白に 花の白

あ〜う〜ちる 花の白に

あ〜う〜ちる 花の白に

あ〜う〜ちる 花の白に

あ〜う〜ちる 花の白に

あ〜う〜ちる 花の白に

あ〜う〜ちる 花の白に

あ〜う〜ちる 花の白に

あ〜う〜ちる 花の白に

あ〜う〜ちる 花の白に

あ〜う〜ちる 花の白に



みづからきこむあし

ひつらふたふたふたふたふたふた

まらねりま

けつらひる ちんちんちんちん

わうつらう 類案し礼節

くらあのみらら ちんちんちんちん

りつら白

あしあし 了業天秦中吟

七年而致仕礼法有明文何及

貧業者斯言如常可憐

八九十 齒為双眸昏 朝露

貧名利 夕陽 衰子孫

後漢書王符傳居累卵之

危為大山 安有朝露之行

思傳世 功山 不惑哉 佳日

積子曰人世一世若朝露 既

於桐葉 則其與秋何

みづら 内 御高精選

心高 全ノ山高 金峯

七高山

るもはらりし

南岳南岳寺仰

佛院金華山の金封を王

弥勒出世の所地。浦王令を

与續。ゆきの高精也。

弥勒を祀る也。弥勒の神也

付属を交て才十减却の如

下生して之を。法一如也

南岳寺仰。ト云々

つぎまはりし 浦王の如く

あまのりゆき 感

母のいさなぬきり

ちもふれ寺仰と

同くはらりし

あまのりゆき

くもはらりし

涅槃経云。善男子。善

女。諸根完具。受三帰依。是

則名。為優婆塞。云々

優りし。佛中子。人人なり

比立比立危儀保實儀保  
夷と宇都の才を  
可も  
云々  
と

長生殿のうらな

七月七日長生殿夜半無人  
私語時在天願作比翼鳥  
在地願為連理枝 長恨亭  
玄宗の比翼連理の歌

未とら  
あ  
百知と

みらくの世 從天尊八減至  
慈尊出世隔五十七俱眠六  
十百千歳 注生要集

後五十六億七千万歳也

あ  
臣

さ

その母の死の事、母の富因  
欲知過去因見其現在果  
欲知未来果見其現在因  
と有り、若世富因つらて  
現をかくの事、  
るが未来にのみあり  
たれども、  
を面白く  
るが事、  
と

と

けり、  
明の事、  
考つた事、  
おろろ、  
新しむ事、  
ん、  
八月十日の事、  
女の事、  
事

Concordia

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)

Concordia (Cordoba)



お湯はきみの色に  
のびる

月とぬるい水と  
はなれ

是も夕のあけ  
お相あり

手あいにさう月とありは  
おのくはさう面中  
よきことさあは  
おまはる月ありさ  
ゆるやうなを  
ていふ

おまのり  
右も

のり  
おま

おま  
河原院

河原院 六条門下  
下里路東

又号六条院  
在源融宅

延喜御記曰  
日入六條院也

院是故  
右源融宅也

大納言源朝長  
奉進院

お湯はきよめる。おれ  
のせい。

*Handwritten notes in a cursive script, possibly representing a phonetic transcription or a specific dialect. The text is dense and difficult to decipher without a key.*

ちんちんのあか ちんちんに  
右もも(あか)  
ちんちんの尻 ちんちんちん  
ちんちんちんちんちんあか  
河原尻あか  
河原尻 六条門の下里路東  
又号六条尻 左在源融宅  
延喜御記曰け日入六條尻也  
尻是故左在源融宅也  
大納言源朝長奉進控院

あまのついで人のあまのついで  
あまのついで人のあまのついで  
あまのついで

昔は江戸の家と會居うまう

又白屋のついで江戸の家と

ついで一連綿也

あまのついで 諸流別當願

あまのついで 別當願は平生に於ては  
又者願はるるに依りて

あまのついで 江戸の家と

あまのついで 江戸の家と

あまのついで 江戸の家と

あまのついで 江戸の家と

あまのついで 江戸の家と

あまのついで 江戸の家と

あまのついで 江戸の家と

あまのついで 江戸の家と

あまのついで

あまのついで 江戸の家と

あまのついで 江戸の家と

あまのついで 江戸の家と





おのゝ 経(きん)の(きん)の(きん)の  
おのゝ(きん)の(きん)の(きん)の  
おのゝ(きん)の(きん)の(きん)の  
おのゝ(きん)の(きん)の(きん)の  
おのゝ(きん)の(きん)の(きん)の  
おのゝ(きん)の(きん)の(きん)の  
おのゝ(きん)の(きん)の(きん)の  
おのゝ(きん)の(きん)の(きん)の  
おのゝ(きん)の(きん)の(きん)の  
おのゝ(きん)の(きん)の(きん)の

願(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ  
願(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ  
願(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ  
願(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ  
願(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ  
願(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ  
願(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ  
願(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ  
願(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ  
願(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ(ねが)ひ

或(ある)下(した)家(か)司(し)の(の)麻(あ)呂(ろ)花(は)

物の名し 大方家司職事  
なまの殿上人 祐大史たかと  
親の泉殿下を 同すし  
大方家もあれ 攝祿の道  
るぬの 品法大史たかなりし  
ぬもつし なる

たを長家のし ことありあ  
まの 沖あのみ 申すも  
おとこ

まのりらて け 頼沖あのみ

人のふんふん くらんてし

しきぬぬ 直の 沖あのみ

やさし人 くらんてし

ぬぬぬぬ 沖あのみ 申す

そりらて くらんてし

陰膳 後進を ぬぬとぬ

念期 せさるし

心より 粥 ぬぬぬぬぬ

胡服 袴とあり

ねん 申す





小宮様殿より御返事なす  
はつきりし事

俗に云ふ御返事  
に届りぬ

しるし

月切と押せん

何れも思ふ事  
女のお返事

しるし

つらね 中將家の御返事

覆書にてもなす  
はつきり

しるし

しるし

御返事

しるし

しるし

夕暮し

しるし

しるし

しるし





あまのこゝろ いろはに

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ



惟まふふふふふ

右にまふふふふ 惟まふふふ

まふふふふふふふふふふ

まふふふふふふふふふふ

ちふふふふふふふふふ

かまふふ 惟まふふふ

まふふふふふふふふふ

まふふふふふふふふふ

まふふふふふ

まふふふふふ 惟まふ

まふふふふふふふふ

まふふ

まふふふふ

まふふふふふふふふ

まふふふふふ 店まふ

まふふふふふふ

まふふふ 夕まふ け切まふ

まふまふ 海まふ







ふしつとあつたまにまゝに  
さうしてくつとをとりかへ  
あつた色に降らぬに  
あまのこにたふし

あまのこにたふし  
あまのこにたふし  
あまのこにたふし  
あまのこにたふし

あまのこにたふし  
あまのこにたふし  
あまのこにたふし  
あまのこにたふし

あまのこにたふし

あまのこにたふし  
あまのこにたふし

あまのこにたふし  
あまのこにたふし

あまのこにたふし  
あまのこにたふし

あまのこにたふし  
あまのこにたふし

らるゝ 居る物言のた  
ま(ら)らとあまら(ら)る  
はる同敷(ら)

えま(ら)つ(ら)げ

い(ら)る(ら)る(ら)と お(ら)る(ら)

ま(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

あ(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

つ(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

つ(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

我(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

お(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

ま(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

い(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

死相の(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

ま(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

あ(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

あ(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

あ(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)

あ(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)る(ら)



内の夜はいてあまく  
例のまはる

夕のあまはる 池のあまり  
と物のあまりのあまりのあまり  
つのあまりのあまりのあまり  
おのあまりのあまりのあまり  
のあまりのあまりのあまり  
と人のあまりのあまりのあまり  
人のあまりのあまりのあまり  
あまりのあまりのあまりのあまり

流のあまりのあまり

流のあまりのあまりのあまり  
作のあまりのあまりのあまり  
あまりのあまりのあまりのあまり  
あまりのあまりのあまりのあまり  
あまりのあまりのあまりのあまり

あまりのあまりのあまりのあまり

あまりのあまりのあまりのあまり  
夜のあまりのあまりのあまり  
夜のあまりのあまりのあまり  
呼のあまりのあまりのあまりのあまり

内々し 難念の方し

事いん 名錫し

了 亥一刻侍長名對面侍長

養之後瀬口武士名對面

所よこまのあしり侍長

手よこまのあしり侍長

けつらに瀧のあしりあり

とよあしりあしり名錫し

しよこしりあしり名錫し

あしりあしりいしりあしり白紙

切しめり

名錫名刻のあしり

あしりあしりいしり

あしりあしりあしりあしり

あしりあしりあしり

是よりあしりあしり

あしりあしりあしりあしり

あしりあしりあしりあしり

あしりあしりあしりあしり

あしりあしりあしり

とよまを 伊豆の国

とよまを(古き初を

とよまを(とよま

とよまを(とよま

とよまを(とよま

とよまを

とよまを

とよまを

とよまを

とよまを

とよまを

とよまを

とよまを

とよまを

とよまを

とよまを

とよまを

とよまを

とよまを

ひつり物格 源氏の人

江持抄 寛平法皇と京師  
の皇所同車後河原院歴後  
衆形鏡入夜月明能取下御  
車皇為御座と皇所念就  
給る同用塗靴之有也声也  
令同給封云融候欲給皇所  
法皇御云汝存生為長我為君  
何出此法乎靈物抱息所  
御腰半死牛童独追侍仍

以彼重念言人之差寄御車  
令兼心息所顔色無之杖抱  
還御後召侍就大法師令  
加持繞復生 け事よ之可  
私不及古事也

あつりけれ  
いふる  
人たるも 毎十方脚  
法師もいふ 加持復念  
相違ふれ 相違ふれ

たかきつねのうらみ

はらけつねのうらみ

ふたつねのうらみ

あふもろあふもろのうらみ

あふもろ ねんご 浮世のうらみ

かきつねのうらみ

きんらねのうらみ 人のうらみ

魂魄のうらみ あり 魂魄 去る

あつねのうらみ

あつねのうらみ

たかきつねのうらみ

いそ 徳傷のうらみ

ちんねのうらみ

世に 自信のうらみ

あつねのうらみ

あつねのうらみ

あつねのうらみ

あつねのうらみ

あつねのうらみ

あつねのうらみ



わがこゝろはなほ  
いづれかへりて  
いづれかへりて  
いづれかへりて  
いづれかへりて  
いづれかへりて

わがこゝろはなほ

いづれかへりて

いづれかへりて

いづれかへりて

いづれかへりて

わがこゝろはなほ  
いづれかへりて  
いづれかへりて  
いづれかへりて

わがこゝろはなほ  
いづれかへりて

いづれかへりて

いづれかへりて

いづれかへりて

いづれかへりて



田舎も古家ならぬとて  
垢をたたくて人の心も  
さし

人の心もさし  
垢をたたくて

垢をたたくて

垢をたたくて

垢をたたくて

垢をたたくて

垢をたたくて

垢をたたくて

垢をたたくて

垢をたたくて

垢をたたくて

垢をたたくて

垢をたたくて

垢をたたくて

垢をたたくて

延喜八年清涼殿西辟塵後

貞崇法師惟清涼殿之暗  
同大人之足音是邪神之  
所居也

とくまのちんを さくまの  
とくまの

あつさあつた ねまのね

めらとけえ けりあつた

とけえあつた

あつたあつた

あつたあつた

世にあつた 或 世にあつた  
とくまのあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

貞崇法師惟清涼殿之暗  
同大人之足音是邪神之  
所居( ) 音( ) 此

とくまのちんを さくまの  
あつあつ

あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

2 ————— 2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000

2000









丁色

取りしつら二年後に  
今、  
三年後の人に  
お丁様

片まね 是にえん ずのぬ あつ

まねいしおん あつ

いさりいしお

源女の人まらあ あつ

いさあ あつ

いさあ あつ

いさあ あつ

いさあ あつ

いさあ あつ

いさあ あつ

いさあ あつ

いさあ あつ

いさあ あつ

いさあ あつ



まろ

いさふれ 行觸(觸)觸(觸)

の(の)まふ 津(津)の(の)お(お)ね(ね)

ふ(ふ)ま(ま)の(の)ま(ま)の(の)ま(ま)の(の)

指(指)号(号)の(の)ま(ま)

ち(ち)あ(あ)ら(ら)あ(あ)ら(ら)あ(あ)ら(ら)

し(し)ま(ま)ま(ま)ま(ま)

か(か)の(の)ま(ま)の(の)ま(ま)の(の)ま(ま)

た(た)り(り)あ(あ) ま(ま)ま(ま)ま(ま)

あ(あ)ら(ら)あ(あ)ら(ら)あ(あ)ら(ら)あ(あ)ら(ら)

ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)

ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)

ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)

ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)

ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)

ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)

ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)

ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)

ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)

ちぬちぬまゝ ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

ちぬちぬまゝ

此の如く人々を以て

之を以て制する

之を以て教訓する

之を以て治する

之を以て用する

之を以て養う

之を以て愛する

之を以て敬する

之を以て信する

之を以て義する

之を以て仁する

之を以て

之を以て

之を以て

之を以て

之を以て

之を以て

之を以て

之を以て

之を以て



けいせいのついでに

（葬送のついでに）

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに

あつちのついでに何れか結核のついでに



源本のらも聊か  
早しと云ふ

さあつては又も

あふ源と申すは終し

魂<sup>こ</sup>又もわくもあつて

ふの物

おし 終る

大將さつし 惟

夕の終り 終る

さつと終る 鴨河

さつと終る 鴨河

さつと終る 鴨河

さつと終る 鴨河

さつと終る 鴨河

さつと終る 鴨河

さつと終る 鴨河

さつと終る 鴨河

さつと終る 鴨河

さつと終る 鴨河

とてその念仲 了昇進の  
無言念佛の一万歳を好む  
よふなり

うやし 寺の初祖也

諸寺初祖後夜の長鎌  
おころし

まふれ 十七夜あまの

宝亀十二年初建立延一十七

更造大仏殿大同二年又造

伽藍

尾名の子なる人

惟々又の人の

大と 大極

り切のい

入ぬれ、浄名に極を立入

火きり

屏のい

屏ののい

たうりけい

ふい

花の今より  
花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

花の今より

ちんちんちんちんちんちん

別 わか の 松子寿

死別已吾齋生別常惻と

と作せり し 死 し 別 い 惻 い

也

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん



つらふらぬえ 蓮華

蓮華の如し

えうあつらへ 蓮華

あきふらぬえ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

あもあつらへ

とてつたしり

ニまはるはちかむる

はるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

まはるはちかむる

いさゝかあつて

物言はしうくねらう

或 妻刺かきもさうなまら

ゆいしうく 眼の裏に

眼の色のほろ

右近初着る着眼いしと

あはれいし

昔ハ眼者も黒糸赤皆

内裏のまはしともさうなまら

まはしうくいし何の塚

つみかきしうく 又治癒の

をえたみめ屋のたを

白糸うくさうりうく

まあしうくいし

同いしうくいし

あはしうくいし

河中の歌橋に夕白あせ

年がゆいし

いし

いしあつて ちかちかあつて



Handwritten text in cursive script on the right page, consisting of approximately 10 lines of text.

Handwritten text in cursive script on the left page, consisting of approximately 10 lines of text.

せうと 責んてと

大ぬて ちんたこ

きんていふん 経管こ

中 せいのいん 舞くとてんていん

あり 言の約 舞い打らふ

叶つらふらふもふらふ

ハカアコリト後  
サよる白

ねんちん 柳市 舞

けいせい 舞も 天下 舞舞

あふらふ 物舞あふらふも  
とけされ

ねんちん 舞

ねんちん 舞

ねんちん 舞

ねんちん 舞

ねんちん 舞

ねんちん 舞

ねんちん 舞

ねんちん 舞

ねんちん 舞

ねんちん 舞







人にきられ人のあはれを  
かへりていふ

とまはれしはなり 夕の光

のほろほろとあはれをいふ

ふらふらとあはれをいふ

つらつらとあはれをいふ

ささささとあはれをいふ

うらうらとあはれをいふ

あはれをいふ

あはれをいふ

かへりていふ

あはれをいふ

あはれをいふ

あはれをいふ

あはれをいふ

あはれをいふ

あはれをいふ

あはれをいふ

あはれをいふ

あはれをいふ

増像本或し

何のいん 昔はちを絶

右の湯りふあはん可也

よのこ(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

よのこ(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

よのこ(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

よのこ(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

よのこ(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

神女(さ)

おち(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

三位中(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

よのこ(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

よのこ(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

細女の(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

おち(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

会(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

よのこ(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

よのこ(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

よのこ(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

よのこ(さ)の(さ)の(さ)の(さ)

こゝろをなす

三つをなす 昔年(1944)

二つをなす 昔年(1944)

一つをなす 昔年(1944)

こゝろをなす 昔年(1944)

右の如きなり 昔年(1944)

右の如きなり 昔年(1944)

右の如きなり 昔年(1944)

右の如きなり 昔年(1944)

右の如きなり 昔年(1944)

夕日宮(昔年(1944))

西京右京(東京)右京

弘仁十年十月昔(昔年)

右右京職各置職二員

すまひを 西京(昔年)

あつた 昔年(1944)

三年(昔年) 昔年(1944)

あつた 昔年(1944)

あつた 昔年(1944)

あつた





とさめくしんせき

改定身書に依りては

従父昇東の( )と云ふ

みねの( )と云ふ

た( )

う( )

し( )

よ( )

そ( )

つ( )

ち( )

う( )

ぬ( )

人( )

ち( )

あ( )

さ( )

あ( )

は( )

あ( )

年々長嶺の上を  
たづね

夕ぐぬの 西白尾色

或 二重尾のさゆ色

みこしん ちんちん色

ふよりぬい ちんちん中色

つがのぬい ちんちん中色

二重尾のぬい ちんちん中色

つがのぬい ちんちん中色

ちんちん中色

家ごと 鶴色 本草

頸短尾色也

或 世俗に云ふに云々

ある一尾を 二重尾の

物種のを 二重尾の家

鳴いしぬい ちんちん中色

一重尾のぬい ちんちん中色

二重尾のぬい ちんちん中色

のちんちん中色

みこしん ちんちん中色

ふよりぬい ちんちん中色

つがのぬい ちんちん中色









みづのうらみ

うらみのうらみ

まはるゝと東 樹影の夜

八月九月に長夜千聲万声

無止時 白氏文集

まはるゝと東のうらみ

うらみのうらみ

うらみのうらみ

うらみのうらみ

空野のうらみ

うらみのうらみ

うらみのうらみ

うらみのうらみ

うらみのうらみ

うらみのうらみ

うらみのうらみ

うらみのうらみ

うらみのうらみ

うらみのうらみ











Handwritten text in Arabic script, likely a list or account. The text is written in a cursive style and includes several lines of entries, some with small numbers or symbols above them. The entries appear to be organized into columns or groups.

Handwritten text in Arabic script, continuing the list or account from the previous page. The text is written in a cursive style and includes several lines of entries, some with small numbers or symbols above them. The entries appear to be organized into columns or groups.



おとろげ 不首略

或 若しおとろげと書くと作れ

事一多より可なり

内々より 蒙束の女装束

布施の料なり

いふのは教書なり

法華三昧堂在止観院西

止観院と云ふ常行堂也

丁座 誦経

おろく 二あり

おろく 誦経の侍法也

もんぎょうを 文章博士

文章博士の官也 昔も云

深きの故増し伝ふる也

もんもんつとせぬ

深き自作の初文ころねと増し

みともなるとこ

願文自作の例

清和天皇貞観九年初学院坊

更建院号延命院自制願文

うれんごうくろく 夕陽のあけ  
ふねのこ

阿彌陀仏 清業の成徳の  
自心用者も是の如く一併  
超世の悲願の地方本願を  
彼極取不捨の如く譲と  
なり かなるといふ海  
こかちあし 源本自修の  
の草と儒者の一説に海  
すくさるるまのようとか

かよんあしん 徳業のあや  
まくちのこ

夕陽のあけとつらら 有世  
たのしみと徳業のあや  
ほつととつらら

布施料の装束の袴の  
たのしみ 源本のあや

とけの解脫也我々の結縁  
のんちまう 今日の結縁の  
をいへんあやの共  
解脫



のこりておる

いふはなれ

七色の河に中有なるは  
六道の輪廻なり

とておのころし

はらわすれり

好んば念誦也

おんを

かき

取替はかきおるは  
をいふ

おのころし

はらわすれり

はらわすれり

たはらわすれり

あはれ

惟たのころし

人あはれ

はらわすれり

ついでに 皇國の

の (1)

の (1)

惟之 (1)

の (1)

の (1)

の (1)

の (1)

の (1)

の (1)

二人

の (1)

の (1)

の (1)

の (1)

の (1)

の (1)

の (1)

の (1)

の (1)



てはまゝにまゝまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝに

伊豫の子に神守りあり

あまのり 空母り

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

遊子今道祖神是也

まゝにまゝにまゝに

あつたしつゝのあつたしつゝ  
あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ

あつたしつゝのあつたしつゝ



Handwritten text in cursive script on the right page, consisting of approximately 10 lines of characters.

Handwritten characters at the top of the right page, possibly serving as a header or a specific section marker.

物  
Handwritten characters on the left page, starting with the character '物' (thing/object).

Handwritten text on the left page, continuing the cursive script.

Handwritten text on the left page, continuing the cursive script.

あ  
Handwritten characters on the left page, starting with 'あ' (a).

Handwritten text on the left page, continuing the cursive script.

Handwritten text on the left page, continuing the cursive script.

Handwritten text on the left page, continuing the cursive script.

Handwritten text on the left page, continuing the cursive script.

Handwritten text on the left page, continuing the cursive script.

行<sup>年</sup>く今わぬ<sup>と</sup>いふ<sup>は</sup>あ  
物<sup>は</sup>信<sup>を</sup>よめ<sup>の</sup>知<sup>し</sup>け<sup>ん</sup>は  
要<sup>す</sup>る<sup>は</sup>い<sup>ふ</sup>は<sup>ん</sup>の<sup>事</sup>  
の<sup>た</sup>ま<sup>は</sup>な<sup>ら</sup>ば<sup>の</sup>事<sup>は</sup>  
あ<sup>ら</sup>は<sup>な</sup>ら<sup>ば</sup>の<sup>事</sup>  
は<sup>な</sup>ら<sup>ば</sup>の<sup>事</sup>



墨府百五七枚

